

うぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし

古川, 大悟
九州大学大学院 : 講師

<https://doi.org/10.15017/7395358>

出版情報 : 文献探究. 63, pp. 57-59, 2025-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



コラム◎古典のひろば

うぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし

古川 大悟

『校本萬葉集』は、一九二三（大正12）年五月に印刷が完了し、同年十月にも刊行される予定であった。ところが九月一日の関東大震災で、製本済の五百部はすべて焼失し、印刷原稿や資料の類もすべて灰燼に帰した。佐佐木信綱はショックのあまり、脳貧血をおこして倒れたという。しかし、「天祐はなほこの事業の上にあつて」、わずかに校正刷二部だけが佐佐木信綱と武田祐吉の自宅に残っていた^①。これをもとにして再び出版の計画が進み、一九二四〇二五（大正13〇14）年に刊行がなされた。刊行開始から数えれば昨年が、全体の刊行から数えればまさに今年が百周年ということになる。

ここに記すのは、『校本萬葉集』に導かれて考えをめぐらすに至ったささやかな一試案の覚書である。

* * *

十二月十八日、大監物三形王の宅に於て宴せし歌三首

み雪降る冬は今日のみうぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし

〔安須尔之安流良之〕
(巻二〇・四四八八)

右の一首は、主人三形王。

うちなびく春を近みかぬばたまの今夜の月夜霞みたるらむ

(巻二〇・四四八九)

右の一首は、大蔵大輔甘南備伊香真人。

あらたまの年行き反り春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け

(巻二〇・四四九〇)

右の一首は、右中弁大伴宿祢家持。

萬葉集巻二〇、天平宝字元年十二月の宴席歌である。『校本萬葉集』を参看するに、第一首、三形王の歌の結句「明日にしあるらし」は、紀州本（神田本）にのみ「明日にしあるべし」とあるようである。念のために紀州本の複製を確認すると、「安須尔之安流良之」の箇所にしたがいに片仮名傍訓で「アスニシアルヘシ」とある^②。本文は「良之」で揺れがなく、萬葉集成立当時の訓を推定するうえでは、ここは「らし」と訓ずるべきであることは動かない。けれども紀州本の訓に誘われて、試みに「らし」の場合と「べし」の場合とで読み比べてみると、当該歌の理解にとつて、あるいは助動詞研究にとつても、いくぶんか興味深いことが考えられてくる。

つとに契沖『萬葉代匠記』（初稿本・精撰本）が指摘したように、この宴の翌日、十二月十九日は立春にあたっており^③、それゆえに当該歌は年内立春への興味を詠んだ先蹤としてとりあげられることが多い。「うぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし」とは、明日が立春であるという節月の知識にもとづいた推断だと理解される（ここで春の到来とは、橘奈良麻呂の変を経て不遇を被っている大伴氏とその周辺にとつて、いくらか希望のもてる方向へと時勢が移ってゆくことの譬喩でもあろう）。とはいえ、節気のような法則的な知識に依拠してものごとを知るとするのは、まさしく「明日にしあるべし」の発想であつて、「らし」の表現性には合わないように思われるのである。

私見では、「べし」が手持ちの知識を演繹的に適用しての推量をあら

わすのに対して、「らし」はむしろ、今まさに出くわした現象から新たに知識を得ることをあらわす⁽⁴⁾。当該の宴席にも参加している大伴家持の別の歌から、そうした「らし」の表現性がよく現れている例を見てみよう。越中で詠まれた「悲世間無常歌」の一節である⁽⁵⁾。

天地の 遠き始めよ 世の中は 常なきものと 語り継ぎ 流ら
へ来れ 天の原 振り放け見れば 照る月も 満ち欠けしけり
あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにほひ 秋付けば
露霜負ひて 風交じり 黄葉散りけり うつせみも かくのみな
らし 紅の 色もうつろひ ぬばたまの 黒髪変はり 朝の笑み
夕変はらひ……
(巻一九・四一六〇)

歌のはじめには、世の無常ということとは伝承によつて得られた、実感から遊離した観念として提示されるにすぎない。しかし、月の満ち欠けや木々の変化を目のあたりにすることで、いよいよ無常ということが実感を伴った知識として感得される。そこに「うつせみもかくのみならず」という表現がある。「らし」は、ある現象に接して、その後潜在するもの(ここでは無常という理法)をしかと認識すること、現象の現象する所以を知ることに対応する助動詞なのである。

だとすれば、「うぐひすの鳴かむ春へは明日にしあるらし」とは、話し手が春の兆しとなる何らかの現象を捉えたときにこそ発されるはずのことばであろう。少し暖かくなってきたわね、(ということ)もうまもなく春なのね、という具合である。してみると当該歌が現象にかかわる描写を持たないことは、一見すると不自然であるようにみえる。しかし逆に、「らし」を用いることで、今まさに春の兆しが現象しているという前提をつくりだしてしまうのだと考えてはどうだろうか。春

を予感させる情景を宴の場に仮構的に立ち現す装置として、「らし」が機能すると思われるのである。

第二首、甘南備伊香真人がそのあたりの機微をうまく受けとめて、春のさきがけとなる光景を具体化してみせたと見られよう。なるほどたしかに今宵の月は霞んでいますものね、春が近いということなのですねと応じたわけである。現象とその所以との関係づけにかかわる表現として、「らし」と「らむ」とが照応をみせる。念のために附言すれば、この日ほんとうに月が霞んで見えていたかどうかは問題ではない。

現実世界とは別な情景を言語世界上に措定することは文学の常套であるし、萬葉集研究史からしても、歌が披露された現実の場を復元するという方向での読解は、もはやその有効性を大いに疑われるようになっていく。重要なのは歌の表現が場を現出させる機能を担いようということであって、所与の場において歌が詠まれるという単純な図式にとどまらず、歌の言語が場を生成するという創造的なありかたを想定することができるといふ点である。考えてみれば宴席歌、とりわけ開宴歌には、梅花宴における「正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ」(五・八一五、紀卿)のように、作歌の現在を現場指示する表現が散見される。こうした表現が場の情景の措定としても機能しうるのであって、当該の「らし」もこれに通ずるものとして捉えることができよう。

このように考えてくると、三形王歌は「らし」によつてあくまでも現場の情景(それが仮構されたものであるとしても)につなぎとめられている以上、たとえ明日が立春であるという節目の知識が背景にあるとしても、その知識を観念的に歌に詠みこんだわけではないのだと

わかる。もともと田中新一氏によれば、当該歌が暦月ではなく節月意識のみに裏打ちされていることは、「従前の文芸に全く見られなかった意識の革新」であったという⁽⁶⁾。それでもやはり、節月的観念をそのまま素材化しているわけではないことを重くみれば、たとえば古今集の冒頭歌「年のうちに春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはむ」とのあいだにはなお大きな懸隔があると言わねばなるまい。

その懸隔をわずかにでも埋めるものがあるとすれば、やはりそれは家持の歌ということになるであろう。当該歌群において、前二首のやりとりで伏流する立春という要素をとりだして前景化させ、それを「年行き反る」という暦月意識とあわせて歌に組み入れたのが、ほかならぬ第三首の家持であった⁽⁷⁾。そもそも家持が日付というものに特別な関心を抱いていたことは、巻十七以降のいわゆる「歌日誌」が日付を明示する様式をとっていることに端的に現れている⁽⁸⁾。また家持のそうした関心が結実した著名な例として、元旦と立春との一致をことほぐ萬葉集最終歌「新たしき年のはじめの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」(巻二〇・四五・一六)を指摘することもできる。三形王歌の「らし」を捉え直すことは、図らずも当該歌群における家持の役割を評価し直すことにつながり、日付や暦法、四季というものに対する家持の並々ならぬ興味を再確認することになるのである。

* * *

『校本萬葉集』の恩恵はじつに多大なものであり、本文・訓の推定や伝本研究にとって非常に重要かつ画期的な書であるとともに、ここに記したような語学的・文学的思索へと誘ってくれる読みものとしても嬉しい。あらためて先学に深い敬意を表し、擲筆の言とする。

注

- (1) 引用は佐佐木信綱『校本萬葉集に就いて』(『佐佐木信綱文集』所収)より。なお、『校本萬葉集』刊行の経緯については、『校本萬葉集』首巻「本書編纂事業の由来及経過」を参照。
- (2) 紀州本の後半(巻一一・二〇)は仙覚文永本系であるが、同じく文永本系の諸本をはじめとして、他本ではこの箇所は「らし」で揺れがない。
- (3) 橋本達雄『万葉集の作品と歌風』(笠間書院、一九九一年)において、このことが詳細に検討されている。
- (4) 拙稿「萬葉集のラシーベシとの関係をふまえて」(『国語国文』九二・一〇、二〇一三年)。
- (5) この歌の理解については鉄野昌弘『大伴家持「歌日誌」論考』(塙書房、二〇〇七年)参照。
- (6) 田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』(風間書房、一九九〇年)。
- (7) 伊藤博『萬葉集釋注』が「年行き反り春立たば」について「暦の春に应じて季節の春が到来する」と解することを参照。また、家持のこの歌の構成については、田中大士「我がやどの鶯—家持の空間構成」(桑原博史編『日本古典文学の諸相』勉誠社、一九九七年)をあわせて参照。
- (8) 家持の日付に対する認識については、注(5)に示した鉄野氏著書に加えて、松田聡『家持歌日記の研究』(塙書房、二〇一七年)に教えられるところが多い。

付記 本稿は、JPS 科研費 24K22502 (研究活動スタート支援) の助成を受けた成果を含む。

(ふるかわ だいご・九州大学大学院講師)